

兵衛、藤氏は藤兵衛、橘氏は吉兵衛也。橘ト吉、同意也。右衛門、左衛門も是に准じ知べし。又太郎の人は太郎兵衛、二男は次郎兵衛、此外もおして知べし。清原氏ハ清兵衛、三善氏ハ善兵衛、文屋氏ハ文兵衛なり云也。

一何大夫と云名は五位になりたる人の名也。五位のくらゐになりたる人を大夫と云也。テ云也、ダイアト、ニゴルハ又別也、さればすべて五位の人を諸大夫と云也。諸大夫ト云フトキハ、たどへば源氏の

人、五位に成たるは源大夫也。平氏は平大夫、藤原氏は藤大夫、橘氏は橘大夫。吉大夫も同前、清原氏は清大夫、三善氏は善大夫など、云也。又太郎の人は太郎大夫、次郎の人は次郎大夫など、云なり。

一伊織、小膳、多門、多宮、要人、藏主、左膳、右膳、藤馬、求馬、久馬など、云名を、東百官と云、禁裏の官名に似たる故、百官と云成べし。京都の官名にあらざる故、東とは云なるべし。平親王將門、下總の國に都を立し時、定たる官名也と云は誤り也。古書に東百官の名付たる人見えず。近代關東の武士の名に左門、伊織、藤馬、平馬など、いふ名あるによりて、東百官といひ習したるを、將門の定し官名なりと附會したる也。官名に似たるやうなるゆへ、東百官といふなるべし。

〔年々隨筆〕今の俗名は成功のなごりなるにつきておもふに、衛門兵衛丞允の外に、爵をもうられつとみえて、今昔物語に、田舎人榮爵かはんとて、京へのぼりて、河原院にやどりて、女を鬼にとられし事みえたり。今某大夫となのは、その餘波なり。又諸寮の次官もうられつるか、某助となる人もあり。某進は京職修理大膳の判官、某内は内舍人、これらは除書に常みゆ。内舍人は、かならず衛府を帶せし物にて、藤内左衛門、源内兵衛などいふを時としては、これをはぶきて、藤内、源内とばかりもいひしなるべし。これらみな成功の遺風にて、今もなほ也。某藏といふは、佐々木源三、梶原平三などのやうに、三を言便に三といひし餘波にて、藏とかくは轉訛なるべし。諸院の藏人になりし事もあるにや。土岐十郎藏人など、太平記にみえしにや。もし此類か、某作某吉は、亂